

---

# 真剣で魔法使いに恋しなさい！！

ふいあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で魔法使いに恋しなさい！！

### 【Nコード】

N8684N

### 【作者名】

ふいあ

### 【あらすじ】

目を覚ましたら、子供のころの肉体に戻っており、まじこいの世界にいた！！しかも寝る前に読んでた漫画の能力が使えるようになっていたので、原作ブレイクを考えたりする主人公 やまびき 山吹吹雪のハーレム&最強を目指すお話です。

この作品はハーレムを目指しますので、原作アンチを含んでいます。初投稿なので色々とおかしな所はあるでしょうが勘弁してください。原作至上の方や駄文だと思った方はご遠慮ください。

いっぱい駄目なところがあると思いますが、感想やアドバイスを

ろしくお願いします。

## 「主人公設定」(前書き)

初めまして、ふいあです。初投稿の作品ですがよろしく願います。

設定を修正しました。

## ～主人公設定～

名前：山吹 吹雪

性別：男

髪と目の色は黒で、髪型は前髪は目を隠すぐらいで、後ろ髪は肩のあたりまでであるので、いつもはゴムで髪をまとめてる。

顔はかつこいいとも不細工ともいえず中の上ぐらい。

朝、目を覚ましたら22歳の社会人だったのに、小学生低学年まで若返っており、まじこいの世界におり、しかも寝る前に読んでいたマテリアル・パズルの能力が使えるようになっていた。

マテリアル・パズルのキャラクター能力で頭もよく、身体能力も百代たち最強クラスの實力があるが魔法で身体能力を封印しているため普段の身体能力は中の上ぐらい。

海と空也と同じ年なのに、柊家から雛乃以外からは兄さんと言われている。

注)つよきす、きみある、ちゃんとしよのキャラクターを出したいと思いますので、少し時間軸をいじります。

例：（主人公は大和たちと同じ年）

乙女、揚羽、百代は同じ年

主人公、レオ、空也は同じ年

・・・（後々、思いついたことなどを追加します）

〜姉、ちゃんとしよじ設定〜（前書き）

ちゃんとしよの設定です。

話が進むごとに修正したいと思います。

く姉、ちゃんとしよう設定く

柘ひいらぎ 雛乃ひなの

柘家の長女、幼女体系がコンプレックスな子だが、柘家のまとめ役。病弱だったが、魔法で完治する。

柘ひいらぎ 要芽かなめ

柘家の次女、頭脳明晰、運動神経抜群（一般レベル）の完璧超人。吹雪のおかげで原作よりも性格はきつくない。

柘ひいらぎ 瀬芦里せのり

柘家の三女、野生じみており鍛えてないのに身体能力は達人レベル。腹違いの姉妹で、最初は皆と壁を作っていたが吹雪と空也のおかげで壁がなくなった。吹雪のことを「にいにいに」と呼んで慕っている。

柘ひいらぎ 巴ともえ

柘家の四女、見た目は怖いが照れ屋でやさしく、ぬいぐるみなどの可愛いものが好き。柘家の家事全般を行っている。

柘 高嶺 ひいらぎ たかね

柘家の五女、要芽以上の頭腦の持ち主で、その代わり小学生以下の運動神経。

よく空也をいじめており、逆に吹雪には甘えており「お兄様」と言う。

柘 海 ひいらぎ うみ

柘家の六女、パソコンや機械関係に詳しく、自分のホームページを持ったり、自分でメカを作ったりしている。

空也に甘えさせ、吹雪には甘える。

吹雪も空也も好きだが、どちらかというとき空也の方が好き。

柘 空也 ひいらぎ くわん

柘家の長男で末っ子、甘えさせられて育てられたため根性を叩き直すために、沖繩の親戚のところへ預けられる。

帰ってきたら巴と一緒に家事をする。

柘 凜 ひいらぎ りん

雛乃たちの母親で若くして亡くなった。

容姿は要芽にそっくり。

第一話 吹雪大地に立つ、そして倒れる (前書き)

投稿すると、書き続けてる人たちの才能に驚かされますね。

## 第一話 吹雪大地に立つ、そして倒れる

吹雪 side

「早く起きてくださいよん・・・早く起きてくださいよん・・・は  
や（カチッ）」

皆さん、おはようございます。山吹吹雪です。

俺の毎朝はボイス音付き目覚まし時計を切ることから始まります。

早く切らないと罵声を浴びせられますからね。

「って誰に説明しているのやら、まだ寝ぼけて・・・ふあ〜。」

欠伸をしたあと、布団から出ると、ふとおかしなことに気づいた。

（何で実家にいるのだ？昨日はアパートで寝たはずなのに・・・それに俺の部屋こんなに広がったっけ！？そんな訳がない思い出せ俺、昨日の夜のこと！）

昨日のことを思い出そうとしたとき、急に頭痛がし、頭の中に色々な情報が流れてきた。

(頭が痛い、気分が悪い、吐き気がする。このDIEOが・・・、クソ余裕がないのになぜかネタにはしってしまった。それはそうと何で昨日の事を思い出そうとすると、会社に行ったことと、小学校に行っただことと両方を思い出すんだよ。何がなんだかもうわけわかめ・・・)

最後に意味のわからないことを思い、そこで俺の意識がなくなった。

~~~~~side~~~~~

(あれ、まだ兄さんが来てない。いつもなら雛乃姉さんの次ぐらいには席についてるのに。)

私は朝食をテーブルに並べていると、兄さんがいないことに気が付いた。家族が自分の席に揃いつつあるなか、兄さんは要芽姉さんや高嶺のように朝が弱いわけでもないのに、この時間帯に来ていないことを不思議に思い、雛乃姉さんに聞いてみた。

「雛乃姉さん、兄さんまだ来てないの？」

「であるな。巴、もしかしたらまだ、・・・は寝ているかもしれぬから、ちと見てきてくれぬか？」

「うん、わかった行ってくるね。」

「あっ！もえ、あなた・・・を起こしに行くでしょ、それなら私も一緒に行くー！！！」

はは、今日も瀬芦里姉さんは人一倍元気だ。

「うん、なら一緒に行こうか、瀬芦里姉さん。」

こうして、私と瀬芦里姉さんはお迎えさんの山吹家に向かった。

第一話〜吹雪大地に立つ、そして倒れる〜（後書き）

まじこいなのに、一発目にちゃんとしようのキャラクター出すのは  
やっぱりまずいですかね？

あと、キャラクターの口調を書くのは難しいですね。

私に何かアドバイスをください。

## 第二話 魔法使いのー力を手に入れた (前書き)

投稿して思ったのですが、見ていただくてうれしいことだなと思いました。

## 第二話 魔法使いの力を手に入れた

（吹雪 side）

「おい、起きろ。」

男の声が聞こえ、俺は目を覚ました。

身体がだるかったので、頭だけ動かして男の声がしたほうを向いたら、今俺のいるところがアパートでも実家でもなく、見渡すかぎりピンク一色の世界だったが、それ以上に俺の前に立っている男を見て驚いた。

その男は俺が寝る前に読んでいた漫画の登場人物の一人、身長2m以上、スキンヘッドでビスケツト・オバ並の筋肉をもつ奇跡の男。

【奇跡のバカ ドルチル】

『そうか、これは夢だ夢に違いない。というわけでお休み……。』

「おい話を聞いてくれ、時間がないんだ。」

ドルチル？が話しかけてきたが無視をして、俺は目を閉じる。

「起きろ。お』うるさいんだよ、木偶の棒！俺は寝るんだ。』っあ。

「

ドルチル？は俺に文句を言われたら、いじけ始めた。

「黒魔こくまやっぱ俺じゃ無理だよ、おなかも減ってきたし。」

このままじゃ話が進みそうにもなく、この場所のことも聞きたかったのでドルチル？に話しかけることにした。

『で、ドルチル？話って何？』

「ん、．．ああそうだ大事な話が合ったんだ。黒魔から話す内容を紙に書いてもらったんだ。」

そう言うとドルチル？はポケットに入っていた紙を見ながら説明を始めようとした。

「んと．．えーと、今君は混乱していると思うがれい、れ．．．ごめん、漢字が読めないから、代わりに読んで。」

(本物のドルチル並にアホだなこいつ)

そうして俺はドルチル？から手紙を受け取った。

『えっと、何々・・・』

手紙には【コマネチ】としか書いてなかった。

『漢字一文字も書いてないし、しかも四文字しか書いてないじゃないかー！？』

思わずツッコミで、ドルチル？の頭を叩いた。

「ふあ、思い出した。確かこんな話だった・・・（中略）。」

話の内容は、神様がパチスロで初の万枚を出し、有頂天になり適当に人間の願望を叶えたいらしい、その時の俺の願望が、まじこい、つよきす、きみある、ちゃんとしようの世界に行くことで、オマケで俺の近くにあった漫画、マテリアル・パズルの全魔法とキャラクターの能力を付加してくれたらしい、ドルチルが説明に来たのは俺がマテリアル・パズルで一番好きなキャラクターがドルチルだったからそうだ。あと頭痛は二つの世界の記憶が重なり合ったため、脳が混乱しことかららしいことと、この世界がピンク色なのは俺の頭の中だからだということ。

設定はちゃんとしようの柊家の向かいに住んでおり、柊 凜ひいらぎがなく  
なった後、落ち込んでた柊家を励ましそのかいあって、原作よりも  
すぐに、皆を立ち直らせ、副産物として雛乃以外からは歳が上にも  
かわらず兄さんと言われ柊家からしたわれるようになった。

「・・・とい訳だ。」

(グッジョブ！この世界の俺。小学校低学年か柊家の人たちのフラ  
グを立てやすくしてくれて、後はつよきすとまじこいとときみある  
メンバーのフラグを立てるだけじゃないか、しかもこの能力があれ  
ば百代にも勝てるな・・・多分、くうくテンション上がってきたぜ！  
—————！)

こうして俺は一人でニヤニヤしながら、今後の考えていた。

「おなか減ったし、俺もう帰る。」

そうドルチルが言うとドルチルの体が徐々に消えていった。

『ああ、説明ありがとうドルチル、それと・・・。』

俺は最後にドルチルに言ってはいけない禁忌の言葉を言った。

『ドルチルお前はやっぱり【母親】似だな。』

そういうとドルチルは死んだような、むしろ死んで消えていった。ドルチルが消えたら俺も眠るように目を閉じた。

## 第二話〜魔法使いのー力を手に入ーれた〜（後書き）

### ドルチル紹介

体はでかいがガラスの心で少しの文句で落ち込むがすぐに忘れ、どんな怪我也三秒すれば忘れるバカ、母親に似ているといわれたら死んだぐらいにテンションが下がり、父親に似ているといわれたらテンションMAXになる。憎めないおバカキャラ

### 第三話 等価交換、アバラ三本

（吹雪side）

目を覚ましたら、自室の布団で寝ていた。

体を起こし周りを見渡すとおかしいことに気がついた、気を失う前と寝間着が変わっており、俺はちゃんと布団から出てたはずなのに布団の中にいた、それに部屋も綺麗になっている。などと考えていると部屋のドアが開き、開けたのは金髪の少女だった。

「????」あ!?!?.....に

「に?..」

「????」にいにい!?!..」

部屋に入って来た金髪の少女が猛スピードで俺目掛けて、ヘッドスライディングをしてきた。

『ひびぶー!』

可愛い妹抱きつきを避けるのは愚の骨頂だと思い受け止めたが、アバラを三本ほどもって行かれた。

(可愛い妹に抱きつかれる代わりにアバラ三本、これが錬金術師の言っていた等価交換の法則かよ。)

『せ・瀬芦里も少し優しくしてくれないかな?』

瀬芦里「知らないよ、一週間も眠り続けて、心配したんだから。」

そついつと瀬芦里は涙目の上目遣いという高等技術を使ってきた。

『も・・・何！俺、一週間も寝てたの。(やべえ、思わず萌えーって叫びだしそうだったぜ)』

何でも、巴と一緒に起こしに家うちに来たら、俺が倒れていたらしく、医者に見せたら異常はないといわれなが、なぜか目を覚まさず、それに連動するかのようにに雛乃も病気で倒れこみ、巴、高嶺、海、空

也は母親のことを思い出し泣き始め、要芽と瀬芦里で皆を落ち着かせたり、雛乃の看病などをしたが、要芽も皆のお姉さんだからといってがんばってはいたが、無理をし続けているらしい。

『俺が寝てるだけで、そんなことがねえ。』

瀬芦里「だけじゃないよ!!、皆どれだけにいにいに支えてもらっているか、私だって……。」

今にも泣きそうな瀬芦里を見て、俺は優しく抱きしめ、頭を撫でた。

『ごめんな、心配かけて。』

瀬芦里「にゃ! (ノノノ)・・・そ、そそそっ思っなら、今度から気をつけてよね、それより早く皆のところに行こうよ。」

『ああ、なら皆を元気付けに行こうか柊家に。』

俺は着替えて、向かいの家に向かった。

（あっ！やべ、アバラ直すの忘れた。）

第三話 等価交換、アバラ三本 (後書き)

次こそ魔法を出したいです……………安西先生

第四話〜フラグ一本、アバラ二本〜（前書き）

急展開です。

## 第四話くフラグ一本、アバラ二本く

く吹雪sideく

柊家に着いた俺たちは、居間に向かった。

『瀬芦里まず、お前から先に行ってくれ、いきなり俺が出たら驚いちやうからな。』

瀬芦里「うん、わかったよ。」

瀬芦里はそういうと皆に説明しに居間に行った。

瀬芦里に呼ばれるのを待っていると、奥の部屋からかすかに声が聞こえ、気がついたら部屋のほうに足を勧め、着いたらそこは雛乃の部屋だった。

少し扉を開くと、雛乃が苦しそうに咳をしていたのを見て扉を開けた。

『雛乃大丈夫か!』

寝ている雛乃に近づいた。

雛乃「おおぶぶき、目を覚ましたのか。」

『いいよ寝てて。』

起き上がろうとした雛乃を止めた。

『ごめんな、俺が倒れたせいで倒れたのだろ。』

雛乃「ふん、自惚れるでるでない。ぶぶきのせいではない、わたしの体が弱いからわるいのじゃ、早くみなのところに行って来い、みな心配してたからの。」

雛乃の声には元気がなかった。

『だが断る!』』

雛乃「な!・・・なにをいうk。」

俺は雛乃の言葉をさいぎって、雛乃を抱きしめた。

『いやだ、なんで今にでも消えそうな女の子を置いてどこかに行かなくちゃならないのだよ。どこかに行ってもらいたければ元気になれよ。それに、いつも皆のことばかりでたまには雛乃も甘えろよ。』

雛乃「で・・・でも、わたしはみなのお姉さんだし、それにわたしはみなに迷惑ばかりかけているし。」

雛乃「それに、ふぶきだつてこんなめんどくさい女はいやであろう・・・。」

『ああ、確かにめんどくさいな。』

雛乃の体が少し振るえ、今にでも泣きそうであった。

『だけど、俺はそんな女でも幸せにして見せるよ。』

雛乃「ば……ばかもの。」

そういうと、雛乃は俺に強く抱きつき泣き始め、俺も強く抱きしめた。

一時すると、雛乃は俺から少し離れた。

雛乃「すまぬみつともないとこを見せてしまった。(ノノノノ)」

『いいよ、せめて俺だけにはそんなお前を見せておくよ。』

雛乃「ふぶきの言うてくれることは嬉しいのじゃが、私は病弱でいつ何が起こるかわからない。だからふぶきの気持ちは嬉しいが答えることができないのじゃ。」

『それなら俺が直してやる。』

俺はポケットに入れていたライターを取り出した。

雛乃「らいたー？そんなもので何をする気じゃ。」

『まあ見てろよ。』

ライターに火をつけると、雛乃の体に火をつけた。

雛乃「な！何を！！」

『雛乃俺を信じろ。』

『マテリアル・パズル                      WWフレア』

そういうと、雛乃の体を白い炎が覆った。

雛乃「なんじゃこの火は体に纏ったら、体が軽くなった。」

『この炎は<sup>ホワイトホワイト</sup>WWフレアって別名「活力の炎」炎を纏っているときは体を癒やし、肉体を強化させる炎だよ、副作用として何度か炎を纏うと体の力を引き出すから、これを毎日やっていけば雛乃の体もよくなるよ。』

雛乃は抱きついて、また泣いた。

そして小声で何度も何度もありがとうと言っていた。

(これで、原作よりも早く雛乃の病気が治ったら良いな、それにしても小学生のくせにクサイ台詞いいすぎたなあ……………)

ちなみ、強化された雛乃の抱きしめで新たに二本ほどアバラが折れた。

#### 第四話〜フラグ一本、アバラ二本〜（後書き）

すいませんでしたー！ー！ー！ー！。

急な話に急なフラグ、そして変な雛乃のしゃべりかた、これも私の妄想と文才のなさで、皆さんを不愉快にさせて申し訳ございません。ですがこれからも、なにとぞ、なにとぞよろしくお願いいたします。感想や注意何でもよろしいので何かこの私にアドバイスをください。

## 第五話 愛・戦士 (前書き)

感想いただきまして、その中で文章についての意見があり、それを参考に少し書き方を変えてみました。

## 第五話く愛・戦士く

く瀬芦里sideく

にいにいに待っていてもらい、私は居間に行った。

居間に着いたら、ひなのん以外が揃っていた。

「たっだいま。」

「おかえりなさい瀬芦里、兄さんの容態はどうだった。」

要芽姉が皆の代表として聞いてきたが、ここで焦らしたら、後々ひどいのでここはすぐ話すことにした。

「にゃんと!?!にいにいは目を覚ました。」

そういうと、赤髪ツインテールのタカが立ち上がり、私の横を通り過ぎようとした。

「にゃっ!」

「痛っ!?!」

通り過ぎようとしたタカをデコピンで先程まで座っていたところまで、吹っ飛ばした。

「いった〜い、ちょっと何するのよ。瀬芦里姉さん」

タカが額を押さえ涙目でこちらを睨んだ。

「タカちよつと、落ち着きなよ。」

「私は落ち着いているわよ。ただ早く兄さんに会いたいただけよ。」

「高嶺少し落ち着きなさい。」

「でも、お姉さま。」

「瀬芦里も意地悪しないで。」

「にやはは、要芽姉は気づいてたか。」

「どづいづこと?」

くーやがもえに聞いていた。

「瀬芦里姉さんの性格上、私たちを兄さんの所に行かせないなら、まず理由を話すはずなのに、それを言わないってことは、本当は兄さんが目を覚ましていないか、すでに兄さんが家にいるかの二つになるんだ。」

「ああそうか、瀬芦里姉さん（この時はまだ沖縄に行っていないので、瀬芦里姉さんといっている）なら、兄さんが目を覚ましたなんて、嘘をつくはずないもんね。」

「ちえく、やっぱりタカぐらいしか引つかからないか。焦らさずすぐに話すつもりだったのだけど、タカの反応を見たらついで意地悪し

たなちゃった。ごめんごめん。」

と言っても、全然誠意が感じ取れなかった。

「にやらそろそろ呼ぶね・・・にいにいこつちに来て良いよ。」

しーん

・・・

しーん

・・・

少し待っても返事は返ってこなかった。

「」「」「瀬芦里（ね）さん」「」「」

四人が私に迫ってきた。

「覚悟はできてるわよね。瀬芦里。」

要芽が黒い笑みを浮かべていた。

「本当だよ、本当ににいにいは来ているよ。信じてよ皆。」

言っても信じてもらえず、皆が無言で迫ってきた。

「瀬芦里姉さんが言ってることは本当だよ。」

その時、後ろから救いの女神がやってきた。

「うみやー！」

「それはどういことかしら、海？」

「それは玄関に行ったら、吹雪お兄ちゃんの靴があったことと、瀬芦里お姉ちゃんから吹雪お兄ちゃんと抱き合った匂いがするからだよ。」

「うみや、いつの間に私を通り抜けたのよ。それになんで私とにいがだk・・・」

しゃべっていると不意に後ろから肩を掴まれた。

ゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴ

かなりのプレッシャーを感じ後ろを振り向くと、要芽姉、もえ、タカがいた。

「瀬芦里、ちょっと兄さんと抱き合ったことの話でもしてもらいましょうか。」

「にゃー……。」

その後、四人に質問されたこと一言一句正確に話した。

この時、クーやは居間の隅で震えていた。

「でも何でうみやは私とにいが抱き合ったことを知っていたの？」

「知っていたんじゃないよ。ただ瀬芦里姉さんから、強く兄さんの匂いがしたただけだよ。」

「あんなんで匂いとかわかるのよ。」

「決まってるじゃない高嶺お姉ちゃん、愛の力だよ。」

そこでうみやが愛はどれだけすごい力語り始めた。

.....

「〜というのが愛の力だよ。それで」

「わかった。わかったから、もういいわよ。それよりも今はお兄様がどこに行ったかってことよ。」

「吹雪お兄ちゃんなら雛乃お姉ちゃんの部屋にいるよ。」

「それ早く言いなさいよ。こうしちゃいられないは、早く雛乃姉さんの部屋に行きましょう。」

こうして、皆でひなのんの部屋に向かうことにした。

部屋の前に着くと部屋のドアが開いており、中を見るとひなのんとにいが抱き合っていた。

「吹雪おにいちゃ〜ん。」

うみゃが二人の空気を無視して、にいにいに抱きついた。

「う、海！」

うみゃが出てきたことに、ひなのんとにいは恥ずかしくなったのか離れた。

ナイスにゃ、うみゃ。

うみゃが部屋に入ったので、私たちも部屋に入った。

「みんなも！もしかして今さっきまでのこと見てた？」

「いいえ、残念ながら、私たちは今来たばかりなので、ここに来た時にはすでに二人が抱き合っているところからでした。」

「そうなんだ。ならよk・・・」

「なので今から何があったのか、すべて話してもらいます。・・・  
瀬芦里、兄さんを居間に連れて行って頂戴。」

「にゃっ！」

要芽姉からの黒いオーラに、畏怖した私は命令をただ忠実に聞くことしかできなかった。

私はにいにいの襟を掴んで居間に向かった。

「まったく、おぬしらはむーどと言うのがわかってないの。仕方な

「いわたしもいくぞ。」

と言つとひなのんが立ち上がった。

「雛乃姉さん大丈夫なの？」

モエが心配してひなのんに近づいた。

「心配いらぬ、吹雪のおかげで少しはよくなったしの。」

私たちは頭に？出たような感じになったが、それも全部踏まえて居間で聞けば言いたいと思つた。

## 第五話 愛・戦士 (後書き)

今回のような書き方はどうでしたか？

何か悪い点がありましたら、色々とアドバイスのほうよろしく願  
いいたします。

わたしの文才では長い文章が書けず、なかなか話が進みませんが今  
後とも、よろしく願いたします。

第六話　右の頬を叩いたら、左の頬も叩け

　吹雪 side

俺が目を覚ましてから数ヶ月が経った。

柊家の皆には転生したこと以外のことを話した。

皆に拒絶覚悟で話したが、皆はそんな俺を受け止めてくれた。

巴なんかは自分も魔法を使えるようになっていたいと言ってきたときはさすがに困った。

雛乃の病気にしても、毎日やると体に負担がかかると思い、周一のペースで治療を行った。

雛乃たちの父親の自称ナイスガイの翔からはなくて感謝された。

そして、原作どおり空也の甘えん坊を治すため、沖縄に飛ばされることになった。

　空也沖縄に行く当日

「つえ〜ん、おねえちゃ〜ん。」

俺も空也の見送りをするために柘家に来ていたが、来たときには空也が海に抱きついており駄々をこね、巴や高嶺は翔を説得していた。

「お父さん、空也がかわいそうだよ。」

「そうよ、お父さん私たちもこれからはきちんとするから、空也をお家にいさせてよ。」

「だめだ。これはすでに決まったことだし、もう沖縄の親戚のほうには話しをつけている。」

そういうと翔は海に抱きついていた空也の腕を掴み車に乗せようとした。

「いやだ。行きたくない、行きたくないよ。」

空也が翔の手をはがそうとしていると、要芽が空也に近づいた。

「要芽姉さん。」

「……………」

要芽は無言で空也に近き、右手を振り上げ空也めがけて振り下げようとしたら、俺は要芽の腕を掴んだ。

「兄さん、離して。」

要芽が俺を睨んできたが、要芽をどかして俺は空也の前に立った。

そして、空也の殴った。

「空也！！いつまでめそめそしてんだ。そんなのだから、沖縄に行かなければならなかったのだろ。」

空也は殴られたことなのか、怒鳴られたことなのかわからないが、驚いてただ倒れながら、俺を見ることしかできなかった。

「それに何で、俺や雛乃、要芽が反対しないかわかるか。」

空也はすぐに首を横に振った。

「少しは自分で考えろ。」

俺は先程左の頬を殴ったので、次は右の頬を殴った。

「それはだな、俺たちも空也と離れるのは悲しいがそれでも、空也ならちゃんと成長して帰ってくると思ってるから何も言わなかったんだ。それなのに、当の本人は甘えまくりやがって、俺たちを失望させるな！！」

空也が雛乃たちを見る。

「がんばるのだぞ、くうや。」

「空也、強い男になって帰ってきなさい。」

さっきまで死んだ魚のような目をしていた。空也の目が生き生きとした魚の目のようになり立ち上がった。

「兄さん、姉さんたち僕もう泣かない強い男になるんだ。」

皆も空也の門出に涙を流すのを堪えた。

「さあ空也、笑って行って来い。」

「ははは、わく」「ゴン」「はう。」

「マテリアルパズル シャイニングベイسن（笑った人の頭の上に  
タライを出現させる、回避不能の絶対魔法ただし、笑わなければ発  
動できない）」

空也はタライにより気絶した。

「わははははは、空也のやつタライくらって気絶してやんの、ダセ  
ーwwww翔もそう思うだろ。」

「あ・・・あ、そうだな、じゃあ俺は空也を連れて行くから、頑張  
って生きるよ。」

翔はなぜか顔を青くして、まるで何かに怯えるかのように、空港に  
向かった。

「兄さん。」

ざわ

ざわ

ざわ

要芽の声に寒気がして後ろを振り向くと、そこには鷺巣様ではなく  
要芽様一同がいた。

「ふぶき少し私たちとお は な ししようかのう。」

「そうだね、にいにい私もOHANASIしたいな。」

俺のセブセンスシズが身の危険を感じ、その場から逃げようとした。

「吹雪お兄ちゃんどこに行くのかな・・・かな？」

すでに遅く、海に背後をとられたと思ったら、いつの間にか俺の手足に手錠がはめられていた。

「さあ、逝こうか兄さん。」

俺は巴に担ぎこまれて柵家に向かった。

「ハアハアハア、もしかしてお説教ですか？」

NONONO

「袋叩きですか？」

NONONO

「もしかして、アレですか!？」

YESYESYES

「oh my God」

「そ・・それだけはらんめー……！！」

ミンミンミンミン

それはまだひぐらしが鳴き始めた夏の話だった。

第六話 右の頬を叩いたら、左の頬も叩け (後書き)

次の話しからつよきすかまじこいのどちらかのキャラクターを出す話にしたいと思っっているのですが、どちらがいいでしょうか？

何か意見のある人は感想をください。

第七話〜助けたのは電ではない〜(前書き)

いや〜、二週間ぶりぐらいの投稿になります。

よつやく原作キャラを登場させました。

## 第七話く助けたのは亀ではないく

く吹雪sideく

空也が沖縄に行き、俺がアレをされてから一週間が過ぎた夏休み、俺は今川神市に来ていた。

理由は簡単今の実力で川神 百代相手にどこまでやれるのかということと。

これが一番の目的はフラブを立てることであつた。

俺の候補は椎名 京、榊原 のぶ・Y・げふんげふん・・・、榊原 小雪、板垣 辰子をメインにあとはなるようになれと思った。

と言つても、辰子はどこにいるか、大体予想はできるが京と小雪に関しては、全く分からなかつたので、先に百代がいる川神院を目指した。

数分歩いて気がついたことがあつた。

それは俺が迷子になっているということだつた。

迷子になったことに気がついても、俺は自分の勘を信じて歩き続けていると、遠くから俺と同年ぐらいの子供が走つてたので、道を聞こうと話しかけた。

「ねえ、ちよつといいかな。」

話しかけると走っていた子供は止まった。

「うん、俺のことか？」

「そう君だよ。道聞きたいのだけど良いかな？」

「いいぜ、困っているやつがいたら、俺は助ける。なんだって俺はヒーローだからな。」

そういうと、頭にバンダナを巻いている少年は虫一号のポーズをした。

くくく

それからお互い自己紹介をして、そうだろうなと思っていたが、少年の名前は風間 翔一だった。

「で吹雪はどこに行きたいんだよ。」

「川神院に行きたいのだけど、道に迷っちゃって、偶々こっちに向かってきた翔一に声を掛けたってわけ。」

「ふーん、何しに行くんだ。入門かなんかか？」

「いや入門じゃないく、川神院にいる川神 百代っていう強い子がいるって聞いたから、来たんだ。」

「すげー、その百代ってやつと戦いたくて、見知らぬ土地にいたのかよ。カッコイイーな。」

「すぐに迷ったけどね。」

などと雑談しながら目的地を目指していると川原の方で数人の少年たちが何かを囲っていた。

何を囲っているのかと思い、目を凝らして見ると俺は少年たちの所に走った。

後ろから翔一の声が聞こえたが無視した。

少年たちは囲っていた女の子を数人で持ち上げ、川に投げ飛ばした。

「何してやがる糞餓鬼ども。」

俺は走りながら、少年たちを怒鳴り、少年たちがこちらに振り向いたが、俺はその横を通り過ぎ、川に飛んだ。

「おい、大丈夫か。」

「ケホ・ケホ。」

川に投げ飛ばされた女の子を持ち上げ、女の子は川の水を飲んでしまったのか、少し咳き込んでいた。

川から上がったら、先程の少年たちは居なくなっており、代わりに翔一が居た。

「さっきのやつらはどこいった。」

「吹雪が川にいる間に、殴ったら逃げつてた。」

おいおい行動早いな、さすが風の子。

「それより、君大丈夫？」

俺は助けた女の子を持ち上げたまま、聞いた。

「女の子side」

学校は嫌い。

あの女のせいで、学校に行くと毎日、毎日、毎日いじめられる。

だから休日は好き。

休日には好きな本が一日中読める。

だから夏休みは好き。

いじめられず、一ヶ月も本を読めるから。

その日、私は図書館に本を借りに行こうとしたら、川原でいつも私をいじめめるやつらに会った。

気づかれたくなかったけど、あいつらも気づきすぐさま私を数人で囲んだら、罵声をあびた。

ここで反抗をしてはいけない。

反抗したら楽しんで、この苦の時間が続くから、こいつらが飽きるのを待った。

場所が川原ということもあり、いじめっ子の一人が川に投げようと言ってきた。

その言葉に賛同するかのように、いじめっ子たちが私に手を伸ばしてきた。

抵抗しようとしたが、数の暴力に勝てるはずもなく、すぐに手足を掴まれ、川めがけて投げられた。

川に思い切り投げられた勢いで、川の水を飲んでしまい、パニックになって溺れそうになると、急に手を掴まれ引っ張られ、両膝下に腕が来てそのままお姫様抱っこ状態になって、持ち上げられた。

「おい、大丈夫か。」

「ケホ・・ケホ・。」

私は川から持ち上げられると、飲んだ水を吐き出した。

そして、私を助けた人を見て、この人がよく絵本で見てた。私の王子様なのかなと思った。

場所が川原ということもあり、いじめっ子の一人が川に投げようと言ってきた。

その言葉に賛同するかのようになり、いじめっ子たちが私に手を伸ばしてきた。

抵抗しようとしたが、数の暴力に勝てるはずもなく、すぐに手足を掴まれ、川めがけて投げられた。

川に思い切り投げられた勢いで、川の水を飲んでしまい、パニックになって溺れそうになると、急に手を掴まれ引っ張られた。

〈翔一 side〉

その日、俺は何か楽しいことはないかと町中を走り回っていると、同じ歳ぐらいのやつに話しかけられた。

話を聞くと、最近武術の天才と噂の川神 百代に勝負を挑むために遠くから来たのはいいが迷子になったというじゃねえか。

俺と歳もそんなに代わらないって言うのに、強いやつと戦ったため、遠くの土地からやってくるなんて、なんてかっこいいやつだと思っただ。

だから俺はこいつと友達になりたいと思っただ。

友達になろうと言ったら、すんなりOKしてくれて、お互い名前を教えた。

吹雪は川神院に行きたいらしく、なんだか面白そうだから、道案内ついでに俺もついていくことにした。

お互いのことを話して、川神院に向かっていると、川原の方で複数の男の子が何かを囲んでいるのが見えた。

二人でそれを見ていると、吹雪が何かに気づき急に、男の子たちの方に走り出した。

「あっおい、吹雪。」

どうしたと思い、男の子たちの方を見ると、同じ学校のいじめられている女の子を川に投げようとしていた。

それを見た俺は、急に自分が恥ずかしくなった。

それは、いじめられているあの女の子を学校で見ても、いじめられているあの子が悪いと思いつけようとしてもしなかったのに、知りもしない女の子を助けに行く吹雪をみたら、今までヒーローになりたいと思っていた自分が恥ずかしくなった。

そう思うと、俺もあの子を助けたいと思いつけ吹雪の後に続いたが、その時の吹雪のスピードは、学校でも上級生に短距離なら負けない自信があった自分よりもずっと早かった。

吹雪が俺の先を走り、男の子たちに怒鳴ると、そのまま横切って川に飛んだ。

俺は呆然と立ちすくんだ、男の子たちの一人をぶん殴った。

「か、風間お前何しやがる。」

「ふん、俺はヒーローだぜ。悪いやつをやっつけてなにが悪い。それとも俺とやるか？」

「くそ、覚えていろよ。」

そういうと男の子たちは逃げてった。

川の方を見ると調度、吹雪が上がってきた。

〈吹雪side〉

川から上がると、風邪を引かないために着替えた。

その際、女の子にも俺の服を貸した。

女の子に「なんで、あんなことになったのか事情を聞くと、なんとか女の子があの子の椎名 京だった。」

「ごめんなさい、私のせいで服濡らしちゃって……。」

「気にするな、俺がしたくてしたのだし、可愛い女の子を助けるのは当たり前だろ。」

そういうと、俺は京の頭を撫でた。

「うん……ありがとう。」 / / /

「椎名今までいじめられてる時に助けなくてごめん。」

二人で会話していると、急に翔一が入り込んできて、京に頭を下げた。

「風間君、頭を上げてよ、いじめられている私が悪いのだから。」

「でも、俺。」

パンパン

俺は手を叩き、二人を俺のほうに見るように背けた。

「はい、過ぎた話しは終わり、早いところ川神院に連れて行ってくれ。」

「そうだな、行くか。」

その時、京を見るとその目は、ドララクエというモンスターが仲間になりたがっている時の目で、アイフルでいうチワワのような目をしていた。

その目を見た俺は、内心お持ち帰りーを連呼していたが、それを表面に出ないようにするのに、自分との戦いが始まり、見事勝利を収めた。

「よかったら、京も一緒に行くか？」

「いいの？」

「良いもなにも、友達だから気にするなよ。なあ翔一。」

「そつだぜ、椎名俺たちはもう友達だから遠慮するなよ。」

「っ、あ……あり……ありがとう。」

京がそう言つと、折角全体的に乾いてきたのに、京の頬が濡れ始めた。

第七話く助けたのは亀ではないく（後書き）

京とキャップはこんな感じでもよかったですかねえ？

この子だしてもらいたいかありましたら、意見をください。

あとだめなところがあったら教えてください。

第八話〜仲間を連れて、いざゆかん鬼退治へ〜（前書き）

初めての連日投稿。

PVが55000、ユニークが10000いきました。

読んでくれた皆さんありがとうございます。

第八話 仲間を連れて、いざゆかん鬼退治へ

く吹雪 side

俺は川神市に来た。

翔一、京を仲間にして川神 百代がいる川神院を目指した。

途中ポーカーに命を掛けたり、ジャンケンに命を掛けたりと、グッドな戦いもなく俺たちは川神院についた。

門の前にヤツさんみたいな人がいたから話しかけた。

「すみません。川神院の方ですか？」

「ん、そうだが、何の用だ坊主ども。」

こいつヤツさんだと思ったらホラ ドだ！

「ここに川神 百代って子いますよね。彼女と腕試しをしたいのですが、お会いできないでしょうか？」

「腕試しねえ。」

ホンドは品定めするような目で俺を見てきた。

「やめときな、最近対戦相手探すのに難儀してるのに、お前みたいな坊主が相手したら一瞬で殺されずぞ。」

そういつとホラン が少し殺気を出して、俺を脅してきた。

翔一と京は殺気を感じ、顔色が悪くなっていた。

二人に害をもたらしたことに俺は少しイラついた。

「おい、ホラン」これ、釈迦堂！子供になに殺気をぶつけているのじゃ」「

そこには山本 げんry・ゲフンゲフン・・・川神 鉄心がいた。

「いやね。この坊主が百代と試合がしたいって言うから、少し現実を教えてあげていたのですよ。」

「だからといって、子供相手に殺気をぶつける理由にはならんじやろうが。」

「そうヨ、子供たちがかわいそうネ。」

次はジャ キー・チ ンが現れた。

「つち、うるさいやつがきやがった。」

「大体积迦堂お前ハ・・・」

俺たちを無視して、三人で話し始めた。

(調子に乗るなよ、クソ共が)

俺は翔一と京に感じないように殺気を出した。

三人は俺の殺気を感じると後退して身構えた。

翔一と京は、突然下がった三人を見て不思議がっていた。

(なんじゃこの子は!?)

(思わず、臨戦態勢をとってしまったネ)

(この餓鬼、実力を隠してやがったな)

「すみませんが、川神 百代さんと試合をしたいのですが、よろしいでしょうか。」

俺の言葉を聴くと鉄心たちは、我に戻った。

「すまぬが、少し待ってくれぬか。」

「わかりました。」

そついうと鉄心たちは百代と戦わずか話し合いを始めたので、俺たちも話し合いを始めた。

「おい、吹雪アレなんだよ。」

「アレって?」

「アレだよ。あのヤクザみたいなオッサンが俺たちを睨んだら、急に体が重く感じて、なんか気分が悪くなってきたんだよ。」

「私も感じた。」

「アレはいうなれば殺気てやつだよ。初めてだとそう感じるだろな。」

「初めてって、なら吹雪は殺気を感じたことあるのかよ。」

「俺も殺気を感じたのは初めてだぞ。」

「でも、吹雪君は平気そうに見えるよ。」

「俺の日常はあのぐらいの殺気よりも、もっと強力な睨みをくらっているから大丈夫だったんだ。」

あの殺気以上と聞き、翔一と京はまた顔を青くしていた。

そうこうしていると、鉄心たちは話がまとまったのかこちらに来た。

「すまん、待たせたの話す前にまず君の名前を教えてくださいませんか？」

「山吹 吹雪って言います。」

「俺は風間 翔一だ。」

「椎名 京です。」

いや翔一たちの名前は聞いてないだろと思った。

「ふおつふおつふお、元気があっていいの。それではわしからもお願いがあるのじゃが。」

「俺でできることなら、できるかぎりはしますよ。」

「話しが早くて助かるわい、ならわしからのお願いは、わしの孫であるモモと、百代と戦ってはくれぬか。」

「「「は?」「」「」

俺たちがお願いしてきたことをあちらもお願いしてきたので、俺たちは呆けた。

〈百代 side〉

釈迦堂さんの殺気を感じた。じじいとルー師範代が中々帰ってこず、じじいが行くときに言われた型を繰り返し続けていた。

「じじいたち遅いな、それにしても最近対戦相手も来なくなってきた暇だな。」

最初はじじいが呼んでくれた格闘家たちと戦えるだけで楽しかったのだが、ここ最近は何、名前だけの弱いものばかりで、世界にはじじいや釈迦堂さん、ルー師範代のような強者がいっぱいいるのだと思っていたが、そういうわけにはいかず、世界は弱者ばかりと思いはじめてきた。

にも関わらず、日に日に私は自分が強くなっていくのを感じていた。

そんなことを考えながら型の練習をしていると、じじいたちが子供三人連れてこちらに向かってきた。

「モモよ、型に雑念が混じりすぎじゃ、集中せんか。」

「じじいそんなことより、後ろの三人は誰だ。」

「おおそうじゃ、この三人は山吹 吹雪君、風間 翔一君、椎名京ちゃんじゃ、歳は皆モモのひとつ下じゃが仲良くするんじゃぞ。」

「友達を増やすために私にそいつらを紹介したわけじゃないだろじじい。」

「さすが気づきおつたか。」

そう言いながら、じじいは自分の伸びた顎鬚を撫でた。

「じつわの、今紹介した山吹 吹雪君と一試合してもらいのじゃよ。」

「何?」

じじいの言葉を聴き、私は山吹 吹雪を見たが、運動能力は高そうだが、高いと言っても一般レベルで私たちと比べると下の下レベルだし、気もまったく感じられない。

戦っても一瞬で終わるだろうが、格闘家ならまだしも、私より一つ下の子供と勝負させると言うことは、こいつに何かがあると考えるまず間違いないな。

「品定めは終わったかい川神 百代？」

山吹 吹雪が話しかけてきた。

「いやまだ、よくわからん。」

そう言うと、山吹 吹雪はしょうがないな〜と言いなから私に近づいてきて、私の目の前で止まった。

「川神 百代。お前は俺と試合と死合どっちがしたい？」

いきなり、山吹 吹雪から放たれた殺気に、びっくりしたが、それはすぐに喜びに変わった。

弱者しかいないのかと思われた世界で、私と歳が近く尚且つ日本人でこれほど濃厚な殺気を出せるやつがいることに、私は日本にまだこれほどのやつがいるならば、世界にはまだたくさん強者がいるのではないかと言う希望に溢れ、笑みが止まらなくなった。

「もちろん、死合だ。」

そう言い、私も自分が出せる濃厚な殺気を山吹 吹雪にぶつけた。

死合のための準備が始まり、私は今か今かと待ちどうしかった。

準備中、山吹 吹雪が何か釈迦堂さんと話しをしていたが、今はそんなことはどうでもよかった。

くくく

「ではこれより、川神 百代対山吹 吹雪の死合を始める。」

私はこれ以上自分を抑えることができそうになく、山吹 吹雪に飛びかかるうとしたら、釈迦堂さんに呼ばれた。

「なんですか、釈迦堂さん用件があるなら早く話してください。」

「百代そうカリカリするな、俺から一つアドバイスと言うか激励と  
言うか、まあありがたいお言葉を教えてやる。」

「だからなんですか？」

このタイミングで焦らず、釈迦堂さんにイラつきながらも、釈迦堂さんからのアドバイスなので結構重要だと思い真剣に聞いた。

「俺からのアドバイスは、『強請るな勝ち取れ、さすれば与えられん』」

私は釈迦堂さんがいきなり、釈迦堂さんらしからぬ難しいことを言うので、少し混乱してしまった。

「あともう一つだ百代。」

「なんですか？」

「これは試合でなくて、死合だ。よゝいドンでは始まらないぜ。」

釈迦堂さんはそう言うと、悪魔染みた顔で笑った。

その言葉と同時にいきなり、後ろからなんらかの衝撃が来て、私は地面とキスをした。

第八話 仲間を連れて、いざゆかん鬼退治へ (後書き)

どうだったでしょうか？

次は百代とのバトルを書きたいと思っているのですが、ここで主人公が勝つのと負けるのどちらがいいでしょうかね？

勝敗のことと八話目のことで何か思ったことがありましたら、ご意見感想をください。

## 第九話〜面倒になったので前編〜（前書き）

勝敗のアンケートをとったら、主人公を勝たせてという意見が多かったので、主人公が勝つ形で書きたいと思います。

アンケートにお答えしていただいた皆さん、ありがとうございました。

## 第九話 面倒になったので前編

〔釈迦堂 side〕

あの坊主やりあがった。

死合前に百代を油断させるために、なにかしらアドバイスをしてくれって頼まれた時には何かするとは思っていたが、まさか不意打ちをするとは。

まあ、あの坊主も最初に試合と死合どっちがいいか聞いてきたし、これは試合と死合の意味をきちんと理解していなかった百代が悪いな。

だがこんなことでやられる百代でもないしな、ほれ立ち上がった。

〔百代 side〕

どういうことだ。

あいつは最初の立ち位置が変わっていない。

確かに私は油断はしていたが、あいつが動く気配が全く感じられなかった。

それに私はなんの攻撃を食らったのだ、拳か？脚か？いやどっちでもない殴られた感触がどちらでもなかった。

なら気を飛ばしたのか？

だがそれはおかしい、あいつから気は感じられないし、気を飛ばしたにしても、私との距離は約20m、その距離からの気を飛ばしたなら私が気づかないはずがない。

というこは、あいつは気配を消すことが異様にうまいということか、それとも私以上の実力者ということだ。

はは、全く持って謎だらけだ、もっとお前のことを教えてくれよ吹雪。

〈吹雪 side〉

百代が立ち上げるなり、俺を見て、にやけ始めた。

(打ち所が悪く、おかしくなったか？)

「吹雪いつたい、私に何をしたのか教えてくれよ。」

「自分の手の内を簡単に教えるわけないだろ。知りたければ、俺を追い詰めてみな。」

「私みたいなの、絶世の美少女がお願いしているのに、お前はなんて罪作りな男なん……だ。」

百代が言葉の終わりとともに、足に気を溜め一瞬にして俺の目の前に来た。

「くられ、川神流奥義 土竜（どりゅう）（適当に考えた技なので気にしないで）  
ください。」

そういつと百代は気を込めた拳を地面に叩きつけた。

そしたら、尋常じゃないほどの砂埃ができ、俺は咄嗟に前蹴りを出したが、もうそこには百代はいなかった。

「っち、どこ行きやがった。」

周りを見ても砂埃のせいで視界が悪く、百代を見失っていた。

「後ろだよ。」

後ろから声が聞こえ、後ろを振り向くとすでに百代が右拳を振り下げようとしていたので、俺は左腕で防御したら、鉄球が猛スピードでぶつかったような感じがして、俺は吹っ飛ばされて、修行僧たちが作っている気の壁に背中を叩きつけられた。

「がは。」

地面に片膝をつき、口から出た血を右手で拭った。

「吹雪！吹雪！！」

「大丈夫か！吹雪。」

後ろを見ると今にも泣きそうな顔をした京と俺を心配そうにみる翔一がいたが、二人とも俺のところに行こうとするが、修行僧たちの

結界により中に入れないでいた。

「へ、このぐらいなんでもないぜ。ただ吹っ飛ばされただけじゃないか。」

「でも吹雪お前の左腕変な方向に向いてるぞ。」

翔一に言われ、自分の左腕を見てみると見事なまでに折れていた。

「大丈夫か吹雪君！？すぐに担架を呼ぶからの。」

鉄心が俺のところに来た。

「大丈夫ですよ。このぐらいなら、簡単に治せますから。」

「治せるとはいつ……おお。」

鉄心が話しかけているなか、俺は自分にWWフレアをかけて、左腕を完治させた。

「うっし、回復完了。それにしてもやさしいんだな百代、回復するまで待つてくれてるなんてよ。」

「なあーに、私は吹雪が何をするのか見てみたかっただけさ、それにしても何だ今のは？気が全く感じられなかったのに骨折した腕を治すなんて。」

「待つてくれたお礼に、っしだけ教えてやるよ。俺の気の量は一般人レベルぐらいしかないが、その代わり魔力があるのさ。」

「気の変わりに魔力だと！？じゃあなにか、吹雪は魔法使いか何か？」

「正解その通り、俺は真正正銘の魔法使いさ、だから俺は気ではなく魔力で身体能力を上げたりするのさ、そして先程の炎は魔力を使った回復と身体能力の増加の炎で種類で言うと補助系魔法だ。」

俺は魔力のことをアバウトに百代に教えた。

「補助系？だとすると戦闘系もちゃんとあるのだろ。そっちを見せてみる。」

そう言うと百代は構えた。

「いいだろ。本当はいろいろな魔法を試したかったのだが、それはまた今度で良いや。今はそんなことよりもお前を倒したい。」

俺は腕に魔力を集中させた。

「いくぞ百代、これが戦闘系魔法、三獅村祭さんしむらまつり（拳の魔法で近距離の士熊シグマ、中距離の牛輪こりん、遠距離の飛燕ひえんと三種類の技を持っている。」

「くう、なんてプレッシャーだ。」

百代は初めて感じる魔力で圧倒されたのか、それとも三獅村祭の危険性に気づいたのか後ろに下がった。

「さあ第二ラウンドといこうか。」

## 第九話〜面倒になったので前編〜（後書き）

いつきに書くこうと思ったのですが、途中いろいろと集中力を切らせましたので、続編になりました。

マテリアルパズルを知っているかたで、百代戦に使ってもらいたい魔法などがあれば書きたいと思いますので感想よろしくお願いします。

ちなみに私的にはカイザートの魔法を使おうか迷っています。

第十話 決着 後半だよ (前書き)

百代との対決の後半戦です。

## 第十話 決着 後半だよ

「吹雪side」

「百代いつまでそうしているつもりだ。」

百代は俺が三獅村祭みんとていむらまつりを発動してから、警戒して俺の周りを移動していた。

「そういうだよ、なぜか止まっていると危険な感じがしてるんでね。」

「はは、さすがは百代だ正解。止まっていたはただの的だからな、だがそれは……」

俺は瞬時に脚に魔力を流し、百代の前に移動した。

「動いていてもあまり変わらないぜ。」

いきなり目の前に現れた俺に驚いた百代は左右にフェイントを入れながら俺から離れようとした。

「考えが甘いんだよ。くらいな、魔法拳 牛輪ごりん（一度の攻撃に五発の拳を放つ、一発でもかるく岩を砕く威力がある）」

「何だと！」

牛輪を受けて、百代は後ろに吹っ飛ばされる。

「さすが百代、五発中三発避けたな。次は避けられるかな魔法拳飛燕ひえん（威力は牛輪より劣るが、遠くまで拳圧を飛ばす）」

飛燕が当たり、百代の顔に当たるが、牛輪より威力が劣るため、その場に踏みとどまった。

「ふっ、さっきの技より遠くに飛ばせるせいか、軽いな。」

「なら絶え続けてみせる。」

俺は両腕に魔力を流し、飛燕を打ち続けた。

百代も飛燕を横に飛んで避けて体勢を整え、飛燕を避け続けたが、数が多すぎて右足に一撃当たり、一瞬動きが止まりそれを見逃す俺でもなく。そこから百代はサンドバック状態になり五分ほど飛燕を打ち続けた。

打ちやめたら、百代は倒れておりクレーターができていた。

「お前は怖いからな、駄目押しさせてもらうぜ。魔法拳 土熊シクマ（近距離の魔法拳で威力は牛輪の五発分合わせた威力の倍はある）」

百代の腹に土熊を叩き込んだら、さらにクレーターができた。

「ふうー、まあ今の百代の実力ならこの程度だろうな。」

そういうと、俺は後ろを向き翔一や京のところに向かった。

「吹雪君危ない後ろ。」

京の言葉に俺は百代の所を見ようと振り向いたら、いつの間にか立っていた百代に右わき腹を蹴られた。

俺は右わき腹を抑えて、その場に倒れた。

くそ、俺とすることがしくじった。

油断したこと

百代の攻撃を受けたこと

どちらでもない。

それは・・・それは、雛乃たちに折られた右わき腹のアバラを直し忘れたことだった。

折れたアバラが肺に刺さっているのを感じると冷や汗が滝のように溢れてきたが、百代はお構いなしにゆっくりと俺のところに向かって歩いてくるが、俺はアバラ骨が肺に突き刺さっており、動くどころか息をするのもきつい。

「吹雪お前のおかげで私は初めて全力で戦えそうだ。」

百代はさっきとは違って変わって、素人でも見えるほどの濃密で大きい気を体全体に包んでいた。

「真剣<sup>まじ</sup>かよ、さっきまでの本気じゃなかったっていうのかよ。」

俺は左手でわき腹を押さえ、百代に気づかれないうちに右手でポケ

ツトに入っているライターを取って、火をつけようとした。

「ほう、これがあの白い炎が出るライターか？」

「!？」

目の前にいた百代が消えて、いつの間にか俺の右側に居て、右手に持っていたはずのライターが百代の手の中にあった。

「火をつけてみても、やっぱりただのライターだ。いったいどのようにして、白い炎を出しているんだ。」

ライターをいじる百代が聞いてきた。

別にWWフレアはライターじゃなくても火があれば使える魔法なので、ライターは携帯しやすいのでただ待っていたに過ぎないが、今傷を治すにはWWフレアかアレしかない。

アレは見た目が、「俺は人間をやめるぞ、J O ジョ」って感じでいやなので、なんとしても百代からライターを奪い返さなくてはいけない。

「そいつはコツがいるんだよ貸してみな。」

「そうなのか、ほらよ。」

百代は俺に向かってライターを下手投げで投げ、ゆっくりと俺のところにライターが飛んできたので、俺は手を伸ばしライターを掴もうとしたら、百代は俺の目の前でライターを蹴り壊した。

「ふん素直に渡すと思ったか、これでお前の回復方法はなくった。これで私の勝ちだ川神流 奥義 無双正拳突き」

百代は俺の顔面に向けて、大量の気に包まれた右拳を放ってきた。

俺は右手で百代の右拳を掴んだが、そんなの関係なくそのまま俺の顔面を殴った。

吹っ飛び、勢いが強く結界が壊れかけ、俺は地面に倒れた。

「百代 side」

「吹雪感謝する。お前のおかげで私はつまらないと思い始めた世界に、生きる希望が生まれた。本当にありがとう、そしてこの勝負は私の勝ちだ。」

そう言うと百代は天高く、右手を空に向けて上げた。

それを見た修行僧たちは勝敗が決したと思い、結界を解除しようとした。

「このバカ共が、まだ結界を切るのではない!!」

鉄心の声に反応した修行僧たちは、すぐさま結界を張りなおした。

「どういうことだ、じじい私は勝ったぞ。あれを見て何でまだ勝敗が決まってないなんていえるんだよ。」

「なら吹雪君を見てみることにじゃな。」

そう言われた私は吹雪が居たほうを見ると、いつの間にか吹雪が立ち上がっており、空を見上げていた。

「百代、俺は最初お前を怪我させないように真剣で戦ったが、百代が予想以上に強いせいで無理そうだ。」

「当たり前だ。私をそんじょそこらの武術家と一緒にしては困る。」

「ああだから、今から俺はお前を殺さないように真剣に戦ってやるよ。」

「そうだな、と言いたいところだが吹雪お前はすでにアバラと右手が折れ、回復方法がない状態でそう長く私と戦ってられるかな。」

私は気を解放した。

「百代、今日はいいい天気だ。太陽もあんなに輝いている。」

反射的に私は空を見ると確かに今日は雲ひとつなく、いい晴れた空だが今それがどうしたということだ。

「行くぞ、マテリアルパズル アデルバ（光の魔力を変換し吸収、攻撃や回復を行う吸収型の魔法。）」

なんだアレは、吹雪の体が光だし傷がどんどん直っていく。

「させるか。」

これ以上回復させないために、吹雪に近づこうとしたら吹雪が自分のおでこ付近で両手を開いた。

「太 けーん。」

急に吹雪から強烈な光が出て、目で直接光見たせいで私は一時的視力を失った。

「百代これで終わりだ三獅村祭。」

目が見えない今、視力が回復するまで私は体全体を気で纏い防御に徹した。

「……土熊……燕……飛燕」

離れたところから、吹雪の声が聞こえるが攻撃する気配がいつさい感じられなかったが、目が見えない恐怖と感がいう、防御を緩めるなど、私は今以上に気を出した。

「飛燕飛燕飛燕土熊土熊飛燕土熊土熊土熊飛燕」

視力が回復しているとそこには自分の拳と拳をぶつけている吹雪の姿があった。

「うっし完成、百代俺の想い耐えられるもんなら耐えてみる合成魔法拳 すいりゅうつうぽんがみ 彗龍一本髪（土熊＋飛燕。彗星のように尾を引く1つの強大な一撃）」

吹雪は目の前のエネルギーの塊を殴り私めがけて飛ばしてきた。

私は腰を落とし右足を後ろに左足を前に出し、倒れないように構えた。

慧龍一本髪が当たるや否や、私は10mほど押されたがその場に耐えることができた。

「ぐぐぐぐ、まさかこれほどの想いを私にぶつけてこようとは、おもわず惚れてしまいそうだよ吹雪。」

慧龍一本髪の威力も徐々に落ちていつてはいるが、私の足の踏ん張りも弱くなってきたが、私は最後の賭けに出た。

今体に纏っている気は上半身下半身半々になっているが、それを上半身に8、下半身に2にしていた。

そのようにしたら数秒程度しか耐えれなくなるが、数秒あれば大丈夫。

私は八割の気を両手に纏わせ、慧龍一本髪を掴み、私の真上に向転換させた。

「はははははは、耐えた耐えたぞ、ふふ」

慧龍一本髪に耐えた余韻に浸っていると、すぐ目の前に吹雪が居た。

「よく耐えたな、百代俺からのご褒美だ受け取れ、焰弧えんこ（両手の指先に全身の力を集め、回転と共に叩き込む打撃技）」

「がっつ」

吹雪が打ってきた技を腹に受け、気を使いはたした私はもろに攻撃を受けその場に倒れこんだ。

「わが勝利、魂と共に。」

「それまで、勝者 山吹 吹雪」

私は最後に勝者の名前を聞いて意識を失った。

第十話へ決着 後半だよ（後書き）

戦闘もですけど小説書くのはむずかしいですね。

前の話に出した死合も全く関係ありませんでしたし、アデルバもだしたのはいいのですが光刺態こうしたたい まで出せませんでしたし、書いていてなんか混乱してきました。

悪い点が多々ありますが感想などありましたらよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8684n/>

---

真剣で魔法使いに恋しなさい！！

2010年10月31日02時53分発行